

1月29日 ルカによる福音書21章1～9節 今日の説教から

説教題：「神殿の崩壊の預言」

私たちは、大きな災害の当事者になると、どうしても「世界の終わり」を意識してしまいます。私たちの命が、私たちの隣人の命が、いつ失われてもおかしくないということを思い出すのです。平穏な日常の中では気づかずにいられた「終わり・死」というものを意識したその時、私たちは平静でいることが出来なくなります。それは災害だけではなく、「戦争」というものも同様に、私たちの目の前に死という現実を突きつけてきます。

しかし、さらに恐ろしいことに、大きな災害や戦争が起きたとしても、「終末はまだ先である」と今日のルカによる福音書21章では語られています。大きな災害が起きて、いくつもの国が戦争を起こしても、終末の審きの時はさらに後なのだといエス様は語ります。

初代の教会においては、終末の時は自分たちが生きている間に訪れると理解されていました。彼らにとって、終末の日とは報いの日であり、自分の信仰が正しかったのだと証明される時を意味します。これまでの律法に縛られた生活ではなく、神様の御心に従った正しい信仰こそが自分たちを罪の贖いと復活へと導く、という希望を持って彼らは歩んでいました。しかし、いつまでもその時が来ないために、次第に神様やイエス様のことを疑う人が出てきました。その「終末の遅延」について、ペテロの手紙Ⅱ3章では、次のように語られています。「ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです」。

このように、終末の日が神様の忍耐と慈悲によって未来へと伸ばされているのであれば、その審きの時が来るのは、「すべての人が神様のことを知った時」なのだと思います。あるいは、それが不可能になった時、「すべての人が神様のことを信じなくなった時」にも、終末の時は訪れることとなります。今日の個所では、神殿の崩壊についての「そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか」という問いに対して、イエス様は「わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言う」と答えています。

偽預言者、偽教師については、先ほどの「ペテロの手紙Ⅱ」において言及されています。特に2章においてその行いは、滅びをもたらす異端を持ち込む、自分たちを贖ってくれた主を否定する、放縦な行いを勧め、欲にかられ、嘘偽りで人々を食べ物にしようとする、人をだますことを好み、人々を欲望へと誘惑し、滅びの奴隷にしようとする、そのような堕落しきった存在であると書かれています。この世の終わりの前には、そのような偽預言者たちが現れ、自分の欲望を何よりも優先し、神様への信仰を冒瀆する時代が来るのです。

私たちにはいつ終末のときが来るのかはわかりません。しかし、「あなたがたは、起ころうとしているこれらすべてのことから逃れて、人の子の前に立つことができるように、いつも目を覚まして祈りなさい」と呼びかけるイエス様の言葉に答えて、私たちはこの人生のすべてを神様のために用いることが求められているのです。いつその時が来てもいいように日々の業に気を配り、今日が最後の一日かもしれないと思いながら、後悔することないように全力でこの人生を、この信仰の歩みを続ける。それが私たちの、この世の終わりに向けるべき歩みなのだと思います。その歩みのすべてが神様によって支えられています。その喜びを胸に、今週一週間の歩みを、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ルカによる福音書 21章 1～9節

- 1:イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、言われた。「確かに言っておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」
- 5:ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」そこで、彼らはイエスに尋ねた。「先生、では、そのことはいつ起こるのですか。また、そのことが起こるときには、どんな徴があるのですか。」イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大勢現れ、『わたしがそれだ』とか、『時が近づいた』とか言うが、ついて行ってはならない。戦争とか暴動のことを聞いても、おびえてはならない。こういうことがまず起こるに決まっているが、世の終わりはすぐには来ないからである。」